

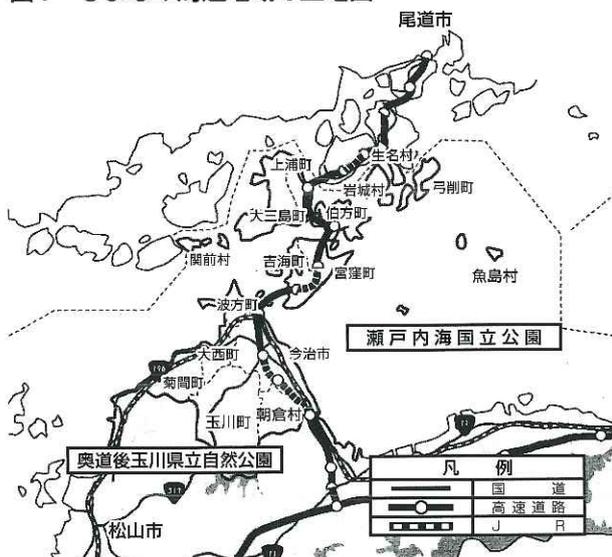
しまなみ海道地域における ルーラル・リゾートを活用した地域戦略

1. はじめに

しまなみ海道地域は、平成2年に承認された「えひめ瀬戸内リゾート開発構想」で特定地区に指定されるなど、豊かな自然環境を生かして他地域と交流を拡大していく先導的な地域になることが期待されてきた。しかし多くのリゾート開発構想がそうであったようにバブルの崩壊や長引く景気低迷により、当初予定されていた開発構想の多くが行き詰まっており、しまなみ海道開通による賑わいも急速に下降してきているなど、その方向性について早急に再検討が必要な時期にきている。

そこで本稿では、新しく「ルーラル・リゾート」というコンセプトを用いて、しまなみ海道地域における地域戦略の方向性について検討を行うこととした。

図1 しまなみ海道地域の立地図



2. ルーラル・リゾートについて

本稿は、「ルーラル・リゾート」という用語を主たるコンセプトとしている。しかしこの用語は、一般的に定着しているものではないため、まず簡単に説明しておく。

ルーラル・リゾートとは、「ルーラル (rural: 田舎の)」と「リゾート (resort: 保養)」を合成した造語で、農山漁村のありのままの資源が都市住民にとっては「癒し」や「ゆとり」の対象となり、そこに滞在すること自体も保養になるというコンセプトである。本稿では、こうしたコンセプトを用いて「都市と農山漁村の交流」を進め、地域の活性化につなげていくことを主題としている。なお、こうしたコンセプトは、1980年代後半にブームとなった「リゾート」(この用語自体、本来「保養」「休養」「長期滞在」などの意味をもっている)などとも基本的に共通しているが、従来の「リゾート」が外発型の大規模投資により進められたのと比較し、「ルーラル・リゾート」は、今ある資源の発見・活用を中心とした地域主導の開発を志向し、一過性の大規模な需要は期待せず、長期的な視野で安定した需要の底上げを目指す点に特徴がある。

3. しまなみ海道地域について

まずしまなみ海道地域について、特に観光面を中心に簡単に整理しておく。

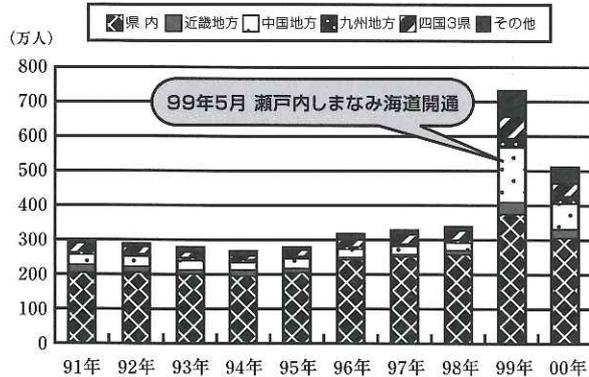
(1) しまなみ海道地域の概要

当地域は、愛媛県の北東部に位置し、高縄半島の陸地部と芸予諸島の島嶼部から構成されている。瀬戸内海国立公園に指定される等風光明媚で知られ気候も温暖である。

古くから海上交通の要衝として栄えたところで、国宝が多く残される大山祇神社等の歴史的資源に恵まれている。また、大島などでは四国八十八ヶ所の「写し霊場」である「島四国」といった行事が今も続いており、そこでは、巡礼者を地域住民がもてなす「お接待」、「善根宿」などの温かい文化も残されている。

一方、当地域の人口(2000年国勢調査: 全体で18.9万人)は、この20年間に急速に減少(減少率10.1%)し、同

図2 しまなみ海道地域(※)の観光入り込み客数推移



(※) しまなみ海道地域(今治市、越智郡)に東予市、丹原町を含んでいる。
資料: 「観光客数とその消費額」愛媛県観光協会

時に高齢化率も上昇した。特に島嶼部ではこうした動きが顕著であり、魚島村、大三島町、関前村等では高齢化率が40%を越える水準となっている。

(2) しまなみ海道地域の観光

当地域には自然環境や歴史・文化などの魅力的な資源があるが、大山祇神社の立地する大三島町等を除いて、これまであまり観光面で目立った取り組みは行われておらず、観光客も300万人前後で推移してきた。

こうした状況を変えたのが、1999年5月のしまなみ海道の開通である。沿線各地では観光施設の整備が進み、開通時には愛媛・広島両県と関係市町村により瀬戸内海大橋完成記念イベント「しまなみ海道99」も開催されたことから、観光客は一気に700万人を超えるまでに急増した。しかし翌年には早くも500万人程度まで減少し、一過性のブームに終わりがねない状況となっている。

図3及び4は、2001年度に観光バスによるツアーの主な立ち寄り先と宿泊先について、愛媛県ふるさと整備課がアンケート調査した結果を示したものである。主な立ち寄り先をみると、大山祇神社(大三島町)、耕三寺や平山郁夫美術館(瀬戸田町)等のしまなみ海道沿線の施設が最も多いものの、琴平町(香川県)、四万十川(高知県)等の四国内他県の施設もほぼ同程度の回答がある。また宿泊先をみると、しまなみ海道沿線と回答したのは、僅か12%に過ぎず、道後・奥道後よりも、高知(足摺他)、本州(広島他)よりも下位となっている。つまり当地域の観光は、開通を契機として観

光地としての知名度が高まった反面、四国全域レベルの広域的観光ルートの一部に組み込まれ、概して一過性の通過型観光地に留まっていると考えられる。

図3 観光バスの立ち寄り先

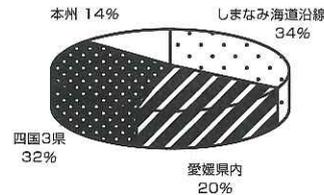
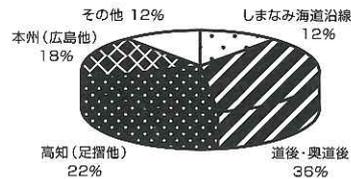


図4 観光バスによる観光客の宿泊先



資料: 「多々羅しまなみ公園における観光入り込み客調査」愛媛県ふるさと整備課
2001年6、8、10月の各2日間(土日)に行ったアンケートによる。

4. ルーラル・リゾートの実現のための方策

(1) 持続的な交流の拡大

しまなみ海道地域は、豊かな自然環境や温かい文化など、「癒し」や「ゆとり」を求める都市住民にとっても十分なポテンシャルを有している。こうした地域のポテンシャルを生かして、「ルーラル・リゾート」を実現していくためには、現状の一過性、通過型観光地から脱却し、ある程度限定的な人々が頻りに当地を訪れ、当地で宿泊を含めて長時間滞在するような交流(本稿ではこれを「持続的な交流」と呼ぶ)に転換していく必要がある。

そこで、そのための前提となる宿泊を含めた「滞在システム」と継続的に訪れたいくなるような「魅力ある活動メニュー」の整備について提案する。

① 滞在システムの整備

滞在システムについては、当地域に宿泊施設や飲食施設が少ないことから、町村や島等のまとまり感のある単位で、<宿泊>→<食事>→<買い物>→<活動>といった滞在時に必要な一連の機能(滞在システム)を整備し、地域ぐるみで滞在時間の延長や経済的波及効果の拡大を目指すものである。

具体的には、推進組織としてすでに設立されている「しまなみグリーン・ツーリズム」(事例1後述する)を基盤に地域内推進組織を設置し、宿泊については「農家(漁家)民泊」、食事については「農家(漁家)レストラン」を新たに整備し、「しまなみグリーン・ツーリズム」における体験メニュー(後述する「学習体験」や「癒し健康」等の活動も含めて)や既存の産直市場と連携して整備を進める。なお農家(漁家)民泊や農家(漁家)レストランについては、既に地区内の岩城村で「青いレモンの島交流体験事業」(事例2)として農家民泊が実施されており、「しまなみグリーン・ツーリズム」でも農家民泊や郷土料理の研究が進められていることから、これらの活動をベースに実現に結びつけていくことが有効であろう。

②魅力あるアクティビティの整備

持続的な交流を拡大していくためには、他の地域にはない魅力ある活動メニューが必要である。この点については、近年当地域でも、興味深い取り組みが見られるようになってきている。そこで現在個々に展開されているこれらの取り組みをシーズとして、「体験・学習」と「癒し・健康」の2つの方向の活動メニューを充実・整備する。

「体験・学習」については、「瀬戸内しまなみ大学」(事例3)と「しまなみグリーン・ツーリズム」(事例1)あるいは「潮流体験・観光漁業」(事例4)等の活動を合わせて総合的な学習体験プランとし、前述の滞在システムとセットで総合学習や修学旅行の誘致を図ることなどが考えられる。

「癒し・健康」については、近年地域内に整備されてきた「海水温浴施設やスポーツ合宿施設」(事例5)の共同PRや共通パスポート化等を実施したり、島四国などの地域の行事と連携させた「癒し」関連イベントの実施などにより、当地の「癒し」・「健康」イメージの確立を図っていくことを提案する。

(2) 定住のための仕組みづくり

特に人口の減少や高齢化が急速に進行している地域においては、地域の担い手の発掘・育成が重要になる。そこで持続的な交流の次段階として、「定住のための仕組みづくり」についても提案する。ここでは、持続的な交流を進める中で潜在的な定住候補者を育成するとともに、彼らに対し当地への定住の「きっかけ」となる情

報を効果的に提供するための体制整備を取り上げる。

①定住促進のための総合的な情報提供

現在本県のUターン情報は、県内や東京、大阪に開設されたUターン相談窓口や専門雑誌、インターネット等の媒体への情報掲載を中心に提供されている。しかし相談窓口については、就職、就農で窓口が異なり、仕事以外の情報提供や相談については個々の市町村の対応に任されているなど窓口が分散している。そこで、情報提供体制の一元化や各種情報の集約化、観光分野で実施されているコンシェルジュ・システムを参考に「ナマ」の情報なども加えて双方向的に提供する「しまなみRETURN-net」の開設などを提案する。

②定住を意識した新しい交流の導入

農山漁村地域への定住や新規就農を希望する都市住民に対して、都市で働きながら就農教育が受けられる「しまなみファーマーズ・カレッジ」の創設や当地域に滞在しながら仕事等を体験できる「ワーキングホリデー」の実施などを提案する。

5. おわりに

以上、しまなみ海道地域におけるルーラル・リゾートを活用した地域戦略の方向性について概説してきた。改めて述べるまでもなくルーラル・リゾートの魅力の源泉は、当地域の豊かな自然や素朴な人柄などの「田舎らしさ」そのものである。こうした魅力を生かしていくためには、地域住民が主体になって、個人対個人の顔の見える交流を中心に、地域ぐるみで息長く取り組んでいくことが重要であろう。今回提案した方策についても、当地域におけるシーズや推進母体となるべき組織、実施にあたっての投資規模、地域住民の参画レベルなどの地域実態に配慮したつもりであり、振興方策の参考になれば幸いである。

なお本稿は、平成13年度において愛媛県から委託された「しまなみ海道地域をモデルとしたルーラル・リゾートに関する調査研究」をベースに作成したものであり、詳しくは同報告書を参照していただきたい。

(当センター研究員 黒河 勝久)

図5 滞在システム整備のイメージ

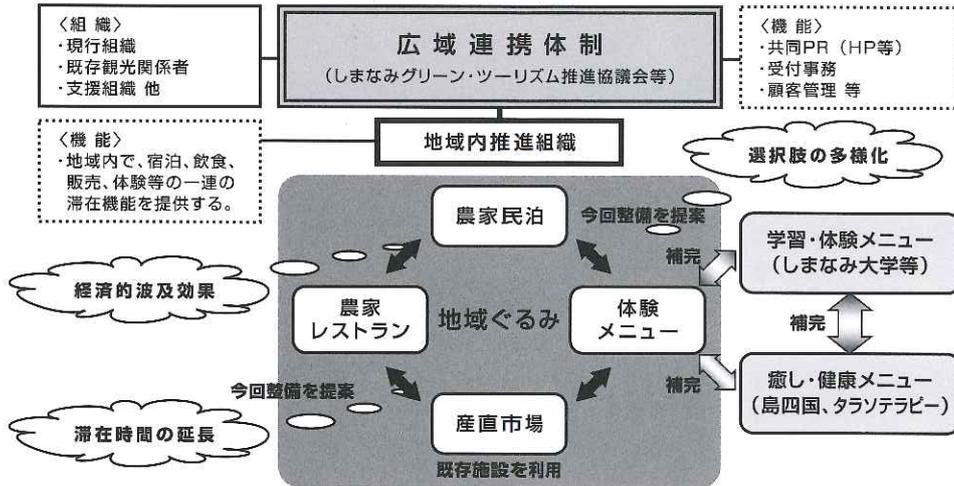
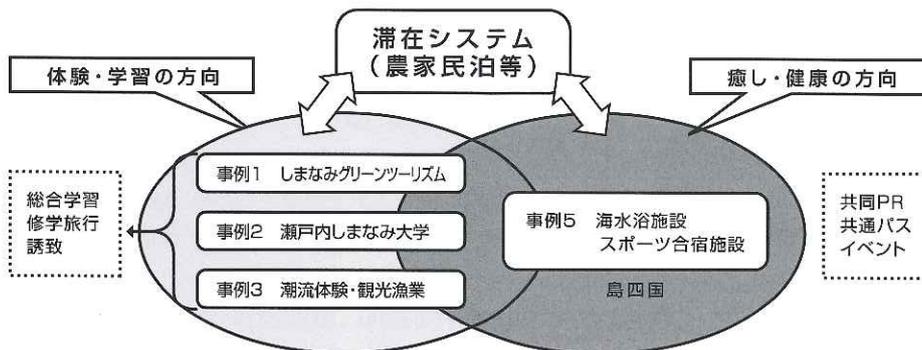


図6 地域のシーズと活動メニュー整備の方向



（事例1）「しまなみグリーンツーリズム」

しまなみ海道地域島嶼部の9町村（吉海町、宮窪町、伯方町、魚島村、弓削町、生名村、岩城村、上浦町、大三島町）と愛媛県今治中央地域農業改良普及センター伯方支所が連携して取り組んでいる体験講座である。地域の生活研究グループが主体となって開発した「ふるさとの味」「収穫体験」「くらしの技」からなる32の体験講座（2000年度募集分）で構成されている。

（事例2）「青いレモンの島・体験交流事業」

2000年度に県の「農林漁業体験学習推進モデル事業」として、都市部の小学生などを対象に岩城村のレモン農家が1泊2日程度のホームステイを実施したもので、好評につき2001年度から対象者や期間を限定せず受入れる農家民泊事業として継続されている。

（事例3）「瀬戸内しまなみ大学」

愛媛・広島両県にまたがるしまなみ海道沿線市町村が連携する体験・学習プログラムである。各地域の生涯学習講座やイベントを基礎として、擬似的に「大学」に模したカリキュラムとして再編成したもの。平山郁夫画伯を学長に迎え、内容のユニークさから全国的に注目されている。

（事例4）潮流体験や観光漁業

宮窪町では、町内の漁師グループと地域づくりグループが連携して「潮流体験」が実施されている。これは、水軍の歴史を聞きながら、漁船で能島沖の激しい潮流を体験するもので、好評を得ている。また、もともと宮窪町、魚島村などでは、釣り客向けの遊漁船が活発に運営されてきたが、近年、岡前村の船上海鮮バーベキューは、遊漁船の顧客層をファミリー客などに拡大することに成功している。

（事例5）海水温浴施設やスポーツ宿泊施設

海水温浴施設では、2000年4月に弓削町でタラソテラピー（海洋療法）を取り入れた（離島部では全国初）町営海水温浴施設「潮湯」がオープンして以来、翌年には、大三島町で海水利用複合型リラクゼーション施設「マールグランシア大三島」、吉海町の民宿でも海水露天風呂施設が相継いで整備された。また、スポーツ宿泊施設では、生名村で「いきなスポレク公園」が整備されたのに続き宮窪町石文化運動公園内にも合宿施設の整備が計画されている。